
夏の花火とおばあちゃん

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の花火とおばあちゃん

【Nコード】

N9556B

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

エッセイです。夏、といえば花火。花火、といえばあたしはおばあちゃんだ。

匂いが好きだ。たくさん吸うと咽るけど。

それからやっぱり綺麗で好きだ。夜闇に星みたいに光るそれ。

なんのことかというと、花火の話。

わたしは小学生の四年生の頃まで毎年、夏といえばおばあちゃん家だった。学校が終わって七月は宿題をやって過ごし、八月の一日、あるいは三十一日の夜に新幹線に乗って長野にいるおばあちゃんの家に行く。

そんなときに必ずおばあちゃんが買っておいてくれたのが大きな大きな花火のセット。ぶわっと本当の花みたいに咲くやつや、ぱちぱちひかえめなやつ。たくさんの花火がたくさん入ったそれをわたしはいつだってたった一日で遊びきってしまう。

おばあちゃんは数本、わたしの花火を眺めた後にろうそくを乗せたお皿を取って、「今日はもうおしまいにしなきゃだよ」と言うけれど、わたしはそれをちつとも聞かないで、ありったけの花火をやった。やがて一人でそれをするのに飽きるともう腰がだいぶ曲がってきたおばあちゃんに無理をさせて一緒に相手をしてもらって、だけどおばあちゃんに無理はさせられないと幼心にわかっていたので、何本か付き合ってもらうと、おばあちゃんの代わりに家事をするお母さんに頼んで近所に住む高校生のなごみちゃんに来てもらった。なごみちゃんはおばあちゃんの家から自転車で五、六分のところにある農家に住んでいて、いつだって笑顔の憧れの人だった。

「おじゃましまーす」

その声がするとわたしはやったと思って玄関までばたばたとお出迎えに行った。なごみちゃんはいつも右手にスーパ一の袋を持って、そこにはまん丸のスイカが入っている。

「これ、うちのなんですけど、どーぞ」

お母さんにスイカを渡すとなごみちゃんはわたしの手を取ってお

ばあちゃんがいる縁側へ連れて行ってくれる。

「さ、始めよーか！」

高校生のなごみちゃんは二つある大きいっかけ 大人用 のを
穿いてわたしは小さいのを穿く。

「危ないから、気をつけるんだよ」

おばあちゃんにも言われたけどわたしはうん、と首を振って、花
火の続きをした。

「綺麗だね！」

いつの間にかお母さんも家事を終えて、なごみちゃん家のスイカ
を持って庭にやってきて、それを食べたら最後にはおばあちゃんも
入れてみんなで線香花火をする。

寂し気なその香りに、光にわたしはうつとりして来てよかったな
と思うのだった。

「また来年も花火、できるといいねえ」

四年生の夏休みの三十日。駅でおばあちゃんがそう言っ、前の
年と同じようにそこで泣いた。見送りに来てくれたなごみちゃんは
そのとき必ずわたしを抱きしめてくれるのだけど、涙は止まらな
かった。

ちよつと変だなと思ったのはなごみちゃんの腕が強すぎるほどに
わたしを抱いたこと、そして、おばあちゃんが、「できるといいね
え」と言ったことだ。いつもなら「しようねえ」なのに、「できる
といいねえ」になっている。わたしはやけにその部分を強く覚えて
いて、後から考えると本能で死期を悟ったのかもしれない。

その年の冬、おばあちゃんは眠った。お母さんが大事な用があつ
て、一日長野に行くと言っ、家を空けた翌日のことだった。涙でか
れた声は聞き取りにくくて、実際に死んだことをはつきりと聞いた
のは家まで迎えに来てくれたなごみちゃんからだった。

「おばあちゃんね、眠っちゃったみたい。もうずっと起きないんだ
って」

そのとき初めてなごみちゃんが恐ろしく大人に見えて、怖かった。

わたしはどこへ連れて行かれるの？ なごみちゃんは一緒だよね？
だけどなごみちゃんの涙を見た瞬間にやっぱりわたしと同じなんだと少しだけ安心できた。

「ねえ、花火さあ……」

長野へ向かう新幹線の中で、わたしは高速で移る景色をぼつと見ながらつぶやく。

「また来年もやろーね、今度はわたしがそっちに行っちゃおうかな」
なごみちゃんは笑った。本当はそんな状況じゃないのに、笑ってくれた。

そして、夏になると約束どおりになごみちゃんはわたしの家に来てくれた。大きな大きな花火のセット持って。

ああ、綺麗。いい香り。ちよつと咽喉が痛いけど、それでも花火が好きである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9556b/>

夏の花火とおばあちゃん

2010年10月11日11時19分発行